

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」

(2015 年度第 2 回研究会)

日時：2015 年 7 月 18 日（土） 13:00-18:00

場所：AA 研マルチメディアセミナー室（304）

概要報告

2015 年度第二回の例会として開催された本会では、共同研究員による 2 題の研究報告、および全体討論がおこなわれた。参加者は 16 名であった。

(1) 川野明正（AA 研共同研究員／明治大学）

「ヤンゴン華人の雲南墓園の墓誌について」

共同研究員の川野氏は二年間の在外研究活動の一環として、ミャンマー連邦において雲南漢人・華僑のフィールドワークをおこなった。今回の発表では、共同研究課題のテーマであるテキストとの関わりから、雲南華人のヤンゴン墓園における墓誌の調査研究の状況が報告された。東南アジアに移住した漢人は、移住した先で墓園を造っている。しかし、各墓碑に刻まれた墓誌は、これまでほとんど研究対象化されていない。こうした墓誌もテキスト研究の題材として有望であり、例えばライフ・ヒストリー分析などの資料として活用が可能である。

報告に対し、刻字刻文に関わる事情や墓誌の内容などについて、質疑がおこなわれた。中国人にとって葬送などは敬遠されがちな文化領域であり、墓誌は新しい研究対象として魅力的である。今後、タイ王国メーサロンなどの雲南華人の進出地域、さらには中国雲南省内の墓園などにおいても、同様の調査研究が期待される。

(2) 野本敬（AA 研共同研究員／帝京大学短期大学）

「雲南地域史におけるテキストの生成・習合・異種混交」

共同研究員の野本氏は雲南地域史の専門家である。今回の発表では、雲南地域民族史の視点から、当地における新たなテキスト研究の可能性が提示された。まず、

現地への漢族の波状的移住による文化習合多様化の可能性について火葬墓碑を例に問題提起があり、次いで地元民による通俗小説など、これまで史実性に乏しいとして「正統的」ではないと等閑視されてきた文献の扱いについて、地元の間が自らの歴史をいかに描くかという視点からは重要な分析対象たりうる点が指摘された。また、母語以外の言語を介して自らの歴史・文化を語るケースについても問題提起がなされた。例えば、貴州イ族の場合、イ文リテラシーの退潮を埋め合わせるかのように、漢文を用いた歴史・文化伝承が盛んになりつつある。これはアイデンティ・クライシスへの対処策として、漢文を表現媒体とした可能性がある。

報告に対し、テキストとして用いる場合の問題点、例えば中央政府の意向や史実性、「中国的」発想の是非などについて質疑がおこなわれた。クリアすべき課題は少なくないものの、テキスト研究の新たな素材として十分魅力的である。

(3) 全体討論

今回の「墓誌」「史料性に乏しいもの」「他文字・他言語による表象」を取り上げた2題の報告は、これまで対象化されなかったテキストに対する研究可能性を示すものであった。他民族・他地域における同様の状況と比較対照がなされ、雲南における新たなテキスト研究領域開拓の一例として、議論が展開された。雲南地域においては、諸事情により現時点では表に出ない（出せない）テキストも数多く存在する。こうした未開発資料に光を当てることが、テキスト研究の重要な使命であることが共有された。

(文責：山田敦士)